
ポスター（ミニ口演） | Antimicrobial Stewardship

ポスター（ミニ口演） 36

Antimicrobial Stewardship2

座長: 添田 博 (東京医科大学病院 感染制御部/薬剤部)

2019年2月22日(金) 13:30 ~ 14:12 ポスター会場2 (神戸国際展示場 1号館2F 展示室)

[P-236] 全注射抗菌薬を対象とした AST活動が抗菌薬使用動向に与える影響 (活動開始後早期の効果について)

○浦上 宗治¹, 沖中 友秀¹, 岡 祐介¹, 濱田 洋平¹, 三原 由起子¹, 於保 恵², 草場 耕二², 青木 洋介^{1,3} (1.佐賀大学医学部附属病院 感染制御部, 2.佐賀大学医学部附属病院 検査部, 3.佐賀大学医学部 国際医療学講座)

【背景・目的】

これまで佐賀大学医学部附属病院（以下、当院）感染制御部はカルバペネム系、抗 MRSA薬、タゾバクタム/ピペラシリンといった一部の抗菌薬について許可制、届出制、早期モニタリングを通じて適正使用活動を行ってきた。2018年4月に ASTが組織されたことを契機に、2018年5月から早期モニタリングの対象を上記以外の全ての注射抗菌薬使用患者に拡大した。現在多くの病院で ASTの活動が開始されており、その成果が注目されている。今回、当院 ASTについて活動開始後早期から抗菌薬使用動向に与えた影響について報告する。【活動内容】

AST活動前（2017年5月～2018年4月）と AST活動後（2018年5月～8月）について、分類別と総合計の抗菌薬用量(DDDs； 1000 patients-day)を調査した。分類別の比較では DDDs < 1.0 未満の抗菌薬と AST活動前から届出制、許可制、早期モニタリングが運用されていた抗菌薬は対象外とした。【成果・考察】

総合計の DDDsは AST活動前169.0 vs AST活動後157.0 ($p=0.057$) で有意な差はみられなかった。分類別の比較では有意差は見られなかったものの第4世代セフェムが24.8%の減少、第2世代セフェムが28.3%の増加が見られた。AST活動により早期から抗菌薬使用量は減少し、広域抗菌薬から境域抗菌薬にシフトする傾向が見られたものの統計的な差が出るまでには至らなかった。